

NCS HOKKAIDO

Nature Conservation
Society of Hokkaido

2013年10月 NO.159

..... CONTENTS

藻岩山雑感2013年	佐藤 謙.....	2
2013年サンル川観察会	佐々木克之.....	4
知床半島・釧路湿原を訪問して.....	多田 晴治.....	6
幕別町止若公園の保護について.....	佐藤 謙.....	8
「自然を語る会」「自然保護大学」開催のお知らせ.....		9
「自然を語る会」報告 その1.....		10
第20回夏休み自然観察記録コンクール審査結果.....		12
お知らせコーナー.....		12



サンル川の景勝地

(撮影 佐々木克之氏)

藻岩山雑感 2013年

会長 佐藤 謙

1. 学生と登る (5月26日)

好天の日曜日、植物を覚える目的のゼミ生15名と、飛び入り参加の山仲間2名とともに、慈啓会病院前の登山口から藻岩山山頂まで往復する。国指定天然記念物の森の中、ニリンソウ、エゾエンゴサク、エンレイソウ、カツラ、アサダ、ミズナラ、シラカンバなど、春の花と木々の種類を一つ一つ観察しながら、また、谷筋のカツラやオニグルミ、尾根筋のミズナラ、シラカンバなど、生育地の違いを観察しながら、ゆっくりと登り続けた。

山頂に到着したとき、ある学生が「芝生と帰化植物が多く、自動販売機が多い山頂は自然ではない」との印象をつぶやいた。前もって私の考えを学生に伝えていなかったが、苦勞して登った（私に無理矢理登らせられた？）山頂が、予想外に観光地化・俗化した場所であったので、それにがっかりしたという。

私のゼミは、人工的な市街地や荒れ地に帰化植物が多く、藻岩山登山路沿いのように自然の中では在来の野生植物が生育することを、五感を使用して体得してもらうことを目的にしている。藻岩山では、登山路沿いに自然の姿を見てきたのに、ようやく到着した山頂が自然状態ではなかった、そのことが学生にとっては大きな印象になり、上記のつぶやきになったのである。これは、自然に親しむ市民にとって普通な感覚なのだ、と思った。

2. 新しいロープウェイと施設を体験する (10月4日)

2012年12月、「もいわ山ロープウェイの改装」に伴い、札幌市の「藻岩山魅力アップ施設再整備」の計画にもとづいて、ロープウェイの中腹駅から山頂駅まで新しい施設が建設された。これらの施設は、建設後まだ1年を経っていないが、マスコミに報じられた評判は決して良いものではない。例えば、高価路線で市民が気楽に憩う場ではない、市民向けよりも観光客向けである、登山者にとって楽しみにくい山頂になった、などの声がある。他方、35億円も費やしたのに、利用者は、当初計画の3分の2程度と報道されている。

私には、これらの悪評の実際を確認しなければならない義務？があった。札幌市が進める「藻岩山魅力アップ施設再整備」計画に対して、北海道自然保護協会は、2009年10月から2010年6月まで6つの要望書・質問書を提出した。札幌市の計画が、標語とは逆に、藻岩山の魅力を減じる計画、または魅力を無視する計画と考えられたからである。しかし、札幌市は「藻岩山の魅力」と建設する施設の内容に関して、私たちの論点や市民の声を反映させず、当初の計画を大きく変更しないまま、施設建設を先行した経緯があった。

10月4日、1,700円を支払ってロープウェイに乗り、山頂駅・山麓駅間を往復する。藻岩山の登山は何度も経験してきたが、ロープウェイ利用はおよそ20年ぶりであった。中腹駅までの眺望は、昔と同様、なかなか良いものであった。しかし、山麓駅の手前に立てられた大形看板「何度も行きたくなる空中散歩 もいわ山ロープウェイ」は、眺望は良くとも値段と内容次第、看板通りには利用されないだろうとの印象を持った。

建設された施設は、札幌市が立案した「藻岩山の魅力アップ」の結果であるが、藻岩山山頂に必然的になければならないものは少なく、「魅力アップ」というコンセプトが感じられなかった。

まず、藻岩山の魅力として、アイヌ語の地名「インカルシペ（いつも上って見張りをするところ）」が意味するように、「眺望の良さ」があげられる。しかし、山頂から多方向の眺望のためには、展望台（山頂駅）の屋上とレストラン「ザジュエルズ」に行かねばならない。屋上では「恋人の聖地」としてのチャペルと「愛の南京錠」を

つるす柵が設けられ、さらに観光地特有の写真屋さんがおり、自動販売機も多い。これらの風景は、山頂からの眺望をゆっくり楽しむ「藻岩山の魅力」を失わせていると感じた。360度の眺望のためには、余計なものは排除して、階段状のベンチがあるだけで良いと思った。また、レストランは、夜景を楽しみながらのディナーや結婚式の場とする高価路線が明確であり、決して市民向けとはいえない。多数の人がじっくり眺望を楽しめる場はないのである。

「スターホール」では、3D映像によって札幌市や藻岩山を紹介する無料番組と、有料の「スーパープラネタリウム」を見ることができる。ここは、映写の最後にカーテンを開けられ市街を見渡せたが、基本的に、暗い部屋での視聴覚が中心、山頂からの眺望とは無関係な施設である。他方、スターホールは、藻岩山を含んで自然の解説を行うことから「藻岩山の魅力アップ」に寄与するとされたが、決して藻岩山の山頂にあるべき施設とは思われない。さらに、レストランとスターホールに追いやられた空間に、一般市民が座れるテーブルが5個設置されていたが、眺望の方向が限られている。施設の外にある山頂三角点からの眺望もまた、展望台の建物に阻まれ一方向しか眺めることができない。私の第一印象は、「スターホール」は山麓であれば良く、山頂における空間は、市民が自由に外を眺める場にすべきと思った。もちろん、眺望が良いレストランは、気楽に入れる価格が必要である。さらに、登山者のスペースは、眺望が悪い狭い部屋である。荒天の際には役立つと思うが、施設全体は観光客中心であるので、泥靴の人々が排除されている、と思った。

すなわち、「藻岩山の魅力アップ」の実態は、市民からも藻岩山の自然からも遠く離れた、持続的でない観光開発である。今後の姿が大いに懸念される場所である。

3. 自然学習歩道を歩く（10月4日）

ロープウェイ改装とともに、展望台（山頂駅）と中腹駅の間、新たに「自然学習歩道」が設けられた。この歩道は、以前にリフト沿いにあった階段状の歩道とは異なって、つづら折りの新たな歩道であり、路面はコンクリートが敷かれ、普通の靴で雨天でも歩けるように、またバリアフリーとして利用できるように、さらに所々にベンチが設けられているので気楽に散歩ができるように、色々と考えられたようである。

しかし、この歩道設置では、一定の幅で森林を新たに伐採し、斜面を切り崩したため、山側の急斜面に石積みをしたところが少なくない。その結果、日当たりの良い帯状の空間ができ、歩道沿いにハルザキヤマガラシ、ピロードモウズイカ、オオアワダチソウ、ブタナ、カモガヤなどの帰化植物が多く侵入しており、エゾイチゴ、タラノキ、ススキなど日当たりの良い場所に生育する陽生植物も多く認められた。

歩道の入り口に、植物の看板が設けられ、16種の野生植物が紹介されている。しかし、その多くは、元来、暗い林床（森林の下生え）に生育する陰生植物であった。これら本来の森林植物を観察するためには、林冠を形成する高木を伐採せず、林内歩道として、暗い林床のままに歩道を設置すべきであった。「藻岩山魅力アップ施設再整備」の計画で藻岩山の自然の魅力が謳われてきたが、この歩道設置は、都市公園で遊具や園芸植物と付き合う場合の工法によって、藻岩山の自然の魅力を破壊した証拠となる。

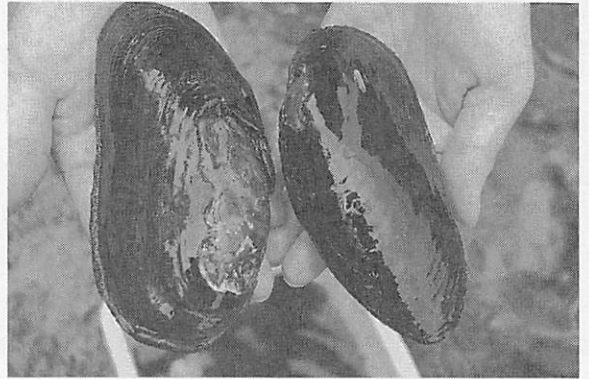
札幌市は、以上の実態について猛省すべきであり、種々のデメリットをなくすよう、改めての論議と工夫をすべきである。歩道については、本来の自然を知る「自然学習歩道」を名乗るのであれば、まずは、帰化植物を抜き続け、在来の野生植物に置き換わるような対策を講じるべきであろう。

2013年 サンプル川観察会

副会長 佐々木 克之

今年度にサンプルダム予算が付いて、工事が始まることになりました。私たちは、諦めないでヤマメ躍るサンプル川を守ろうとしています。その活動の一環が、毎年サクラマス産卵時期に合わせた現地観察会です。今年は、7月にエコツアーも行われました。

1. エコツアー（7月27日）・・・札幌発のバスが18人を乗せて駅北口から出発、エコツアーとは、十分なガイドがつくこと・移動にムダな燃費を使わないこと・地元の店やみやげものを利用することの3つが条件。下川町の Pasta 店で昼食、12時過ぎに着いて、現地ですらに10名が乗って、まずカワシンジュガイ観察（写真1）、この貝は寿命約100年、幼生はヤマメのエラに付着して初めて貝になれる、ヤマメが（したがってサクラマスが）絶えると絶滅する種です。子ども達も熱心に箱メガネ（写真2）で探して、カワシンジュガイを採りました。

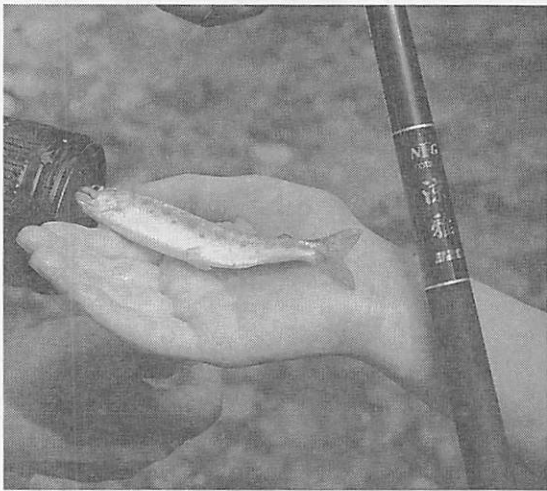


(写真1)

最後に、サンプル川の景勝地ともいべき滝のある川を見ました（写真3）。ここで、子どもたちが釣竿を振ると、針が水中に入った瞬間ヤマメが釣れて（写真4）、何回やっても釣れて、ヤマメの多さに驚きました。エコツアーでは地元の買い物もするようになっていましたが、時間がなく直ちに札幌へ帰ってきました。



(写真2)



㊦ (写真4) ㊦ (写真3)



2. サクラマス産卵観察会（9月8日）・・・旭川駅前で札幌と旭川からの参加者17名が乗車、バス中で、○サンルダムは名寄市の治水に必要なため、名寄川の氾濫をふせぐのが目的ですが、名寄川は過去に一度も氾濫していない、○サクラマスは放流事業が成功しているサケと違って、健全な河川がないと減少してしまうこと（ヤマメの生息している川は健全な川の証拠）、○サクラマスとヤマメが育つために、河畔林・砂や小石・蛇行することの三つが条件必要だが、サンル川はそのどれをも備えていることが話され、質疑応答しました。下川町で現地参加者とスタッフ14人が合流して、カワシンジュガイとダム工事現場とサクラマス産卵の観察を行いました。カワシンジュガイはエコツアーで述べたので省略。ダムの堤体が建設される場では、河畔の大量の樹林が伐採されていました（写真5）。



(写真5)

参加者は、こんなに小さい川に巨大なダムを造ることに疑問を述べていました。現地スタッフの事前調査では産卵準備をしているサクラマスが少ないとのこと、実際にメス一尾が尾を使って産卵場を準備しているところを観察できましたが、それ以外の産卵行動を見出せませんでした。しかし、出水直後なのに澄んでいて、河畔林が生い茂ったサンル川（写真6）は、流域にわずか一か所しか砂防ダムがない奇跡の川という説明に、バス内での勉強も役だって、参加者は、サンル川の素晴らしさを実感したと述べていました。アンケートでは以下の声が寄せられました。



(写真6)

・川床に初めて触れる事ができ感動した・川岸で子どもと話しながら魚を見ることができて嬉しかった・サクラマスやヤマメが豊かな自然の中で生き抜いていることを感じた。30名と多すぎず、山野に関する知識に長けた方が多くお話がとても楽しかった。・来年も（お子さんからは夏の観察会）是非参加したい・このような場所に連れて来てもらえたことに感謝・ダムはショックだが、自分も何もしてこなかったことを反省、最後に記念写真（写真7）を撮って、来年の再会を楽しみに帰宅の途に着きました。



(写真7)

知床半島・釧路湿原を訪問して

多田 晴治（徳島市在住）

「知床には珍しい動植物がいるわけではありません。北海道に棲むごく普通の動物が暮らしています。知床が世界遺産になったのは 標高 1,660 m の羅臼岳や知床の山々から、そのまま海に落ち込んだ険しい地形に、北海道に住む 9 割の動植物、多種多様な生態系がこの狭い半島の中に暮らしているからなのです」。「知床の特徴は？」との質問に、「知床のガイド屋」PIKKI さん（若月愛さん）は、そう答えてくれた。

愛さんは大阪府堺市の出身で、知床のガイド歴 10 年目。夫婦で独立して 2 年目とのこと。2005 年に知床が世界自然遺産に登録された直後は、大勢の人が知床に押し寄せたという。現在は以前の静かな知床に戻ってきたと、愛さんはほっとした表情で話した。

私たちが依頼したコースは、定番の知床五湖ではなく、森の中と海岸の断崖を歩くコースである。杉とヒノキの林に覆われた私の住む四国の山々に比べると、ダケカンバ・ミズナラ・カシワなどの広葉樹にトドマツ・エゾマツ・イチイ・ハイマツの針葉樹の自然林が生い茂る 10 月の知床の自然林は新鮮で涼しかった。ヒグマやエゾシカやキタキツネの暮らす森で野鳥のさえずりを聞き、動物や植物の説明を受けながらの道を歩いた。2 キロの森を 1 時間半かけてゆっくり歩いたので、疲れは感じなかった。「鹿だ！」の声に 10m 先を見ると雌鹿が 1 頭私達を見ている。しかし目を合わせても逃げるような気配はない。知床では人間は危害を加えないと分かっているからで、動物と人間との共生を実感した。そのような鹿もこの 10 年間で 3 倍に増えたという。雪が少なくなり、木の実が豊富になったことが、その一因らしい。地球の温暖化が、知床の生態系にも影響を及ぼしているのである。愛さんの話では 2 年前から国立公園内の鳥獣保護区内でエゾシカの駆除が始まり、その成果なのか今年は知床でもエゾシカを見かける回数も少なくなったと遠くを見ながら話した。



「何の糞ですか？」とメンバーの声。足元を見るとこんもりとした黒色。愛さんはヒグマにも毎月のように遭遇しているという。「糞でヒグマがどんなものを食べているのかが分るんです」。その糞に混じる木の実を木の棒で丁寧に調べていた。アイヌ語でキムン（山）カムイ（神）と呼ばれたヒグマに、深い愛情を持って接しているのがわかる。知床でこれからもヒグマを始め全ての動物と人間との共生が続くことを祈った。

森を抜けると断崖にでた。ここから名前のおりの断崖コースだ。知床らしい断崖絶壁と海の景観を望むことができるダイナミックなコースとの事前説明に嘘はない。はるか彼方の知床岬を見ながら、海面 100m 以上の断崖を歩いた。今回の旅行に参加した仲間は、全員知床の原生林に入るのは初めてである。自然環境や環境保全には多少の関心を持っているが特に動植物に詳しいわけではない。そんな我々でも「自然！て、いいなあ」「いつまでもこんな自然が残ってほしいなあ」と思わせる魅力を持っている。さすが世界自然遺産の知床である。

前日までは釧路にいた。6 年程前、上流の原始林や中流域の湿原をカヌーで下ったことがある。バブル時代、湿原の丘まで開発が計画され、乱開発から釧路川湿原を守るため湿原周辺の民有地を買い取る「ナショナルトラ

スト運動」に取り組んでいる「NPO法人トラストサルン釧路」の杉沢副理事長から水源の森を案内された。トラストはナショナルトラストで、サルンはアイヌ語で湿原の意味だ。そしてその活動に賛同してNPO法人トラストサルン釧路の会員になったが、私の住む町から釧路は遠く、年会費を払うだけで、直接活動に参加することはなかった。

現在の235名の会員も日本全国に広がっていて、釧路市民会員より市外、道外会員の割合が多いそうである。私もそんな会員の一人である。会員として現地訪問がしたいと思いつつも毎年送られてくる会報「サルン便り」や「湿原新聞」また、会のホームページで活動状況を知るだけだった。そこで定年を迎え自由な時間がとれるようになりNPO法人トラストサルン釧路の10月の恒例行事である「どんぐり記念日」に合わせて、定年退職した仲間を誘い参加することにした。どんぐり記念日とは会の小学生などによる「どんぐり拾いや植え込み」などの森づくりのための作業で10月の定例行事だ。前夜、私達は、黒沢理事長、松本理事との交流会で活動の経過や苦労話を聞く。埼玉県出身の黒沢理事長は、獣医師学校時代から釧路が気に入って何度か通ううちに住み着くことになった。現在NPO法人トラストサルン釧路の理事長として、湿原周辺の民有地のナショナルトラスト運動を進め、リーダーとして農家との間に立って湿原の保護の理解を求めて奔走されている。松本理事も東京都出身でタンチョウの研究のため釧路に住まわれ、8名の理事の一人として活動を支えてこられた。私達は二人の役員から直接に話を聞くことで、トラストサルン釧路の現状や課題を少し共有することができた。

翌日の早朝、どんぐり記念日の作業の前に、会員でカヌーガイド「ミンタラ」の橋口さんのご好意で塘路湖畔から細岡まで約10kmを2時間かけて湿原を案内していただいた。「ミンタラ」とはアイヌ語で「庭」の意味で、湿原を自分の庭のように知る橋口さんには相応しい。カナディアンカヌーがスタートしたのは早朝の7時。ミンタラの橋口さんは九州出身で30年前より釧路でガイドをしているが、彼の目・耳・鼻の感度に驚ろかされた。「オジロワシの雌でしょう」「正面枯れ木にカワセミです」「この匂いは狐でしょう。左に鹿の親子が三頭」視界も明るくないうちから



周囲にひそむ動物について次々と教えてくれた。私は寒さも忘れてオジロワシ、カワセミ、ヤマセミ、タンチョウ、エゾシカの親子と次々に現れる動物に感動した。水面から見える湿原の景色は陸上からとは違って新鮮で、湿原の植物も詳しく説明を受けながらあっという間に2時間の時間が過ぎた。

カヌーでの湿原の観察を終え、達古武沼湖畔の森へ移動し、どんぐり植樹祭に参加した。10名程の小学生が昨年撒いた「どんぐり」から生まれた苗の植え替え作業を行い、我々は釧路市の会員の早坂さんに先導され若木を鹿害から守るために張めぐまされたネットの点検と補修作業を行った。

エゾシカは2m位ジャンプするそうで、そのため相当の高さのネットが必要になるとのこと、腰まで埋まるササをかき分け、一区画500坪以上の広さのネットを順番に点検して、破れ個所があれば結束バンドで修理をする。根気と体力のいる作業である。ササを刈り取り、ネットを修理しながら新しい植樹作業を広大な保有地で黙々と続けた。大変手間のかかる湿原の保全作業は地元の皆さんが汗をかいて行っている。私は自分を少し恥ずかしく思った。訪問前までは湿原の保全を安易に考えていたことを恥じた。現地で体験してみて初めてわかることは多い。

ナショナルトラスト運動は経済的な理由での無理な開発による環境破壊を守るため市民運動によって土地の買い上げや保全を自治体に求める運動だがボランティアが基本とはいえ、基金運営のために市民からの寄付金による部分も多いと思う。

今回の参加メンバーは、リタイヤして兵庫、愛知、三重、徳島、千葉で暮している仲間である。知床のトレッキングや釧路湿原カヌー観察で北海道の自然環境の素晴らしさを、NPOトラストサルン釧路の行事に参加して釧路の会員の皆さんとの触れあい旅の素晴らしさを体感した。また、活動（作業）を支える現地の皆さんのご苦勞も理解した。



北海道は今後も定期的に訪問したい魅力に溢れた土地であり、「この素晴らしい自然を後世に残す責任が有る」と活動されているグループは道内には多い。日頃現地での活動（作業）に参加できない我々にできることは、金額の多少にかかわらず寄付を行うことではないだろうか。最近、企業や個人で社会貢献が言われているが寄付は最も手軽な貢献活動だと思う。日本の寄付文化は欧米に比べてまだまだ貧弱だといわれているが寄付文化の定着には、とりわけリタイヤした全国のシニアへの期待役割は大きいと、今回の北海道の旅であらためて思った。

幕別町止若公園の保護について

会長 佐藤 謙

この7月、幕別町の町民有志「新しい幕別町をつくる会（会長：岡田正著氏）」から当協会に、大規模な駐車場建設によって役場近くの止若公園（ゲートボール場と芝生）と隣接する幕別神社の鎮守の森が失われることに心を痛める町民が多いので、その地域の「自然の価値を調べてほしい」との支援要請があった。

8月11日、筆者が現地の植物を調べたところ、この鎮守の森は、かなり小面積であるが、自然性の高い冷温帯性落葉広葉樹林で合計53種の野生植物が確認され、過去の十勝平野の自然の姿を想起させるものであった。また、止若公園も綺麗に整備されており、これらが一体となって、町民にとって格好の憩いの場になっていると判断された。

それらをまとめた「幕別町止若公園の植物について」を添付し、地元の会と当協会の連名で「幕別町止若公園存続についての要望書」（2013年9月24日付）を作成し、幕別町長宛に提出した。この要望書とは別に、地元の会では、町長宛に「幕別町止若公園存続についてのお願い」と題した署名簿を用意し、9月20～30日の短期間で532筆の署名を集めた。その結果、10月17日の町議会において「止若公園を存続し、駐車場は他の場所に考慮する」とされ、翌日、地元の岡田さんから協会宛てにお礼の連絡がとどけられた。

自然を壊す行為を止めることはなかなか難しいが、自然保護に熱心な地元の方が主役になり当協会が応援する形であったからこそ、このような良い結果が生まれたように思う。

2013年度「自然を語る会」のお知らせ

夕方のひと時、「自然を語る会」として、自然について様々な話題を提供してもらい話し合う会を開いてお
ります。常連の方も少しずつ増えてまいりましたが8月から10月は終了しております。今年度最後の11月の
実施日とその話題をお知らせいたします。

下記の要領ですので、気軽にお誘い合わせの上ご参加いただけますよう、お待ちしております。

- ④ 11月21日(木)「宮島沼の保全とワイズユース～ごはんを食べてマガンを守る」
牛山克巳氏 (宮島沼水鳥・湿地センター専門員)

[要旨] 宮島沼は7万羽を超えるマガンの飛来地としてラムサール条約に登録されたが、水面の縮小や富栄
養化など、近年急速に水環境が悪化している。マガンによる小麦食害問題も、旧来からの重要な課
題である。これら課題に対して地域住民を主体とした取り組みが始まっている。マガンの早まる渡
り、大発生したナゾのカエル、湿地の文化プロジェクトなど、最近の話題とあわせてご紹介する。

会場：北大クラーク会館・大集会室 (札幌市北区北8条西8丁目)

日時：11月21日(木) 18:00～20:00 定員：50名 参加費：無料

「2013年度自然保護大学」のお知らせ

— 自然を知る・親しむ・学ぶ —

今年度の自然保護大学を講師の方々の協力により下記のように開催いたします。

植物が、生活する中で、自分の子孫を増やすためにどのような戦略をとったか (大原氏)、希少種オジロ
ワシ個体群のおかれている現況 (白木氏)、および噴火後にできた裸地から、どのように森林と土壌が発達
してきたかという植物遷移 (春木氏) について講義を行います。

今回の三つの講義は、私たちの自然観をさらに深まることとなるでしょう。

会場：北大クラーク会館・大集会室 (札幌市北区北8条西8丁目)

日時：2013年11月9日(土) 13:00～18:10 定員：50名 参加費：一般2,000円、学生1,000円

内容：開校式 (13:00～13:10)

- ① 「植物の生活史研究からみる自然保護の大切さ」 13:10～14:40
大原 雅氏 (北海道大学大学院地球環境科学研究院・教授)
- ② 「極東地域におけるオジロワシの生息現状と保全」 14:50～16:20
白木彩子氏 (東京農業大学生物産業学部生物生産学科講師)
- ③ 「有珠山噴火後の土壌と森林の生成はどのように進んでいるのか？」 16:30～18:00
春木雅寛氏 (北海道大学総合博物館資料研究員)

閉校式 (18:00～18:10)

上記2件の申し込み・問い合わせは、下記までお願い致します。

北海道自然保護協会 電話：011-251-5465、FAX：011-211-8465、Eメール：info@nc-hokkaido.or.jp

【注意】 演者が配布資料を用意する場合、準備の都合がありますので、事前に申し込んでいただけますよう、よろしくお願い致します。

2013年度「自然を語る会」報告(その1)

夕方のひと時、「自然を語る会」として、自然について様々な話題を提供してもらい話し合う会を開いております。常連の方も少しずつ増えてまいりました。今年度は8月から始め11月まで、4回の開催を予定しております。1回目の報告として8月の第1回と9月の第2回の報告をします。

〔自然を語る会〕

会 場 : 北海道大学クラーク会館・大集会室(札幌市北区北8条西8丁目)

第1回 8月29日(木) 18:00 ~ 20:00

「ヒグマはどんな動物？」 ~身近になったその存在~

話題提供者 早稲田宏一氏(NPO法人EnVision環境保全事務所)

先ず、今回は事前の申込み者数20名に対して、その2倍以上の52名の参加者が集まりました。近年札幌近郊&市街地への出没がテレビ・新聞紙上を賑わす季節が近づいたこともあり? ヒグマに対する市民の関心の深さを感じました。

今回は学生時代からヒグマの行動調査などに関わり、現在も行政からの委託を受けてヒグマと関わりを持ち、自らも狩猟免許を持って第一線で活動されている早稲田さんに講師をお願いしました。

話は私達がヒグマに対してどのようなイメージを持っているか? から始められました。北海道に生息している最も大きい野生動物です。多くの人が、恐ろしい・怖いとのイメージを持っています。また、ヒグマの被害による死者はこの20年間で15名とのこと、その半数はハンターです。我々が普段生活している中での交通事故による死者よりもはるかに少ないのです。



ヒグマは冬眠中に子供を生みますがその大きさは500ccのペットボトル位です。その子供は1年後には体長1m・体重60~70kgにも大きくなります。小さく生んで大きく育てるの典型です。今回は子供のヒグマ・メスの成獣・オスの成獣の3枚の毛皮を持参し見せてくれました。オスの成獣は300kgもあった大きなヒグマのもので札幌の豊滝で捕獲したヒグマでした。ヒグマは雑食性で冬眠から目覚めた春先にはフキノトウなどの草本類を少しずつ食べます。冬眠明けはまだ身体が慣れてなく大量に食べることが出来なく、少しずつ慣らしていくとのこと。夏になるとオオハナウドやフキなどの茎の根元に近いところをかじって食べています。また、アリやザリガニも好んで食べるようです。秋になるとヤマブドウ・サルナシ・オニグルミなどの木の実を食べますが、夏から秋に移行する時期は野生の食べ物は端境期となり、一方、人間の作った畑ではトウモロコシや果実の季節ですので、この時期に人里に出てくるが多くなるとのこと。

ヒグマは大きな体を維持するためには大量に食べなければなりません。その時に最も効率よく手に入る食べ物が必要で、この食べ物に執着します。人間が食べているもの、特にジュースなどの甘いものは一度味を覚えるといつまでもそれを求めて人里に出てくることになるので、人間の食べ物の味を覚えさせないことが大事です。ヒ

グマの被害を防ぐには出遭わないようにすることが第一で、・山や森では音を出しながら歩く、・独りで山や森に入らない、○糞や足跡をみつけたら引き返すこと。でも出遭ってしまった場合は、○決して走らない、○ヒグマを刺激しない、○対面したまま静かに戻る。子グマを見つけた時はすぐに立ち去ること（近くに親グマがいる可能性大）。これまでの調査では、現在札幌市には全体で40～50頭のヒグマが棲息している。特に藻岩山から西野の周辺など人間の行動エリアと非常に近いところにも棲んでいるようです。それだけ自然が豊かであるとも言えますが、ヒグマと人間がお互いに不幸にならないためにも、我々としてもゴミの管理や食料品の保管など日頃から注意して生活して行きたいものです。（荻田記）

第2回 9月26日（木） 18:00 ～ 20:00

「全国の事例から風力発電のデメリットを考える」

話題提供者 佐藤 謙（当協会会長）

最初に、原発は温暖化防止に役立つなどメリットしかいわず、安全神話をふりまいて、福島原発事故を引き起こしたことを述べて、現在は、再生可能な自然エネルギーはクリーンであるとメリットしか述べず、デメリットを語っていないことが問題である、メリットとともにデメリットもとりあげて考えることが重要であると、講演の趣旨を述べた。

自然エネルギーの一つである風力発電（以下風発）には、自然破壊と健康被害の二つのデメリットがあると述べて、とくに健康被害問題に力点をおいた講演であった。全国の風発の中で健康被害を与えている、愛媛伊方、和歌山由良、三重伊賀、愛知田原、静岡東伊豆と南伊豆の具体的例を紹介した。健康被害は低周波音やシャドーフリッカー（風車の羽根が作り出す交互に生じる影と光）などにより生じること、住民の被害の訴えによって風車が止まることもある一方、住民が被害を訴えたのに対して、行政が調査を依頼した日本気象協会が、風発推進のNEDOが示した基準以下なので被害はないとして、住民の訴えを退けた例などが紹介された。道内の風発を精力的に見て回った結果も紹介された。

質疑では、とくに石狩海岸に予定されている風発の規模や影響の問題が取り上げられた。約80基が計画されていること、高さが100mを越える大型のもので影響が既存のものより遠くまで及ぶ危険性があること、厚田の市民風力による住民説明会では、「聞こえない音であるので健康被害は起きない（聞こえない低周波音が健康被害を起こしえるのに）」と断定的に述べる専門家が現れ、石狩市も風発導入に熱心なことが紹介された。また、不規則な発電の風発を維持するために火力発電が必要であり、結局風発で二酸化炭素は減少しないのに、一般市民は、風発は地球温暖化防止に役立つという間違っただけの考えにとらわれていて、きちんと説明する重要性も訴えられた。

さらに、風発の環境影響評価の重大な問題点が佐藤さんから指摘された。環境影響評価は、ある事業によって悪影響がでることを予測して、悪影響がでないように修正するか、場合によっては事業を中止するようにするものである。しかし、風発の場合は、影響が出るかどうかかわからないので、風発を作って運用してみて考える（予防原則を考えず、悪い意味で順応的管理という言葉が使われる）として、風発建設を中止する、または修正する選択肢をなくしているという、環境影響評価に値しないことが行われていると指摘した。今後は、石狩市と話し合いを行うこと、市民に風発のデメリットをよく理解してもらう努力（例えばわかりやすい本の出版）が必要であるという意見が出された。比較的かたい内容の自然を語る会であったが、38名の参加で熱い議論がなされた。

（佐々木記）

「第20回 夏休み自然観察記録コンクール」 審査結果

応募数 71点 28校
 1年(18) 2年(10) 3年(15) 4年(5) 5年(14)
 6年(9)
 審査日 2013年9月24日(火)
 審査員 北海道新聞野生生物基金、北海道自然保護協会

金賞 1名
 吉川貴一郎(札幌市立大倉山小学校6年) 甲虫の翅の秘密

銀賞 2名
 菅原健太郎(札幌市立真駒内桜山小学校2年) 見つけた!!
 ほっかいどうの虫
 藤松 奏丞(恵庭市立恵み野小学校3年) セミの羽化と一生

銅賞 6名
 島田 煌希(札幌市立川北小学校2年) おじぎそうのかんさつ
 岩山 航生(斜里町立ウトロ小学校2年) コエゾゼミのよう虫
 ~せい虫のずかん
 山谷惟一郎(上富良野町立東中小学校3年) マダニについて、
 マダニの取り方色々
 鈴木健次郎(大空町立女満別小学校5年) ヒメヒナコウモリ
 山岡 景康(苫小牧市立北光小学校5年) 顕微鏡で見た小さな
 プランクトンの世界
 多田 遥(札幌市立大倉山小学校5年) 家の周りにいるハチ

佳作 20名
 遠上 力生(旭川市立近文第一小学校1年) あさがおのふしぎ
 朝比奈京太郎(札幌市立大倉山小学校1年) みのまわりにすむい
 きもの

大井 菊哉(札幌市立大倉山小学校1年) ウチダザリガニのほん
 谷岡 幸和(札幌市立大倉山小学校1年) はつかだいこんのかんさつ
 吉田 柊輝(札幌市立真駒内桜山小学校1年) うみでみつけた
 いきもの ずかん
 小林 結香(札幌市立藻岩小学校2年) 夏の虫のかんさつ
 佐々木美橙(中富良野町立中富良野小学校2年) 庭の野さいを
 切ったらどんな形?
 小田島美優(北広島市立大曲小学校3年) トノサマバツのひみつ
 名張 直大(函館市立亀田小学校3年) ほくのまだらばった
 稲野 響(札幌市立真駒内桜山小学校3年) みちかな アリ
 の かんさつ きろく
 関根 晴紀(札幌市立西岡小学校4年) スジエビモドキのかんさつ
 木村 優歌(札幌市立大倉山小学校4年) チューリップの秘密
 と観察
 高橋 諒(江別市立豊幌小学校5年) 豊幌の水辺にすむ生き物
 柳引 秀斗(札幌市立大倉山小学校5年) プランクトン観察記
 録ノート
 佐藤 帆(札幌市立大倉山小学校5年) じぐもの記録
 細野 暉紘(鶴居村立鶴居小学校5年) 「オニグモは考える!!」
 岸本隆之介(札幌市立真駒内桜山小学校5年) 大きな実がなれ
 受粉 大研究
 鎌田 志保(札幌市立大倉山小学校6年) すがたの変わる植物
 谷 菜摘(札幌市立大倉山小学校6年) 雑草について
 柳町なお子(札幌市立大倉山小学校6年) 家のまわりに生えて
 いる雑草・野草の観察

学校賞 2校
 札幌市立大倉山小学校
 札幌市立真駒内桜山小学校

活動日誌

2013年6月
 23日 「みんなで守ろうヤマメたちの川」 集会参加

2013年7月
 1日 参議院選にあたって北海道のダム問題について各党ア
 ンケート結果、道政記者クラブで会見公表
 2日 第20回夏休み自然観察記録コンクール案内各学校あて
 発送
 6日 北海道サンルダム問題東京集会・水源連開発問題全国
 連絡会主催
 10日 藤城川砂防計画案について、渡島総合振興局治水課と
 協議
 18日 2013年度第2回運営委員会
 22日 銭函風力発電計画問題第3回小樽市との交渉
 27日 サンル川エコツアー観察会参加
 30日 会報158号発送
 31日 伊藤邸視察

2013年8月
 28日 風力発電に関して小樽市との交渉
 29日 第1回自然を語る会「ヒグマはどんな動物?~身近に
 なったその存在~」講師早稲田宏一氏
 31日 2013年度第1回理事会

2013年9月
 8日 サンル川観察会参加
 12日 北見道路ももんが裁判第一次訴訟控訴審初公判傍聴
 19日 北見道路ももんが裁判第二次訴訟判決傍聴
 20日 2013年度第3回運営委員会
 24日 第20回夏休み自然観察記録コンクール審査会
 26日 第2回自然を語る会「本州の事例から風力発電を考え
 る」講師佐藤謙氏

- 8月19日 北海道開発局長、室蘭開建建設部長宛(平取ダム)
 【ダム堤体建設工事用道路建設に関する質問】FAX
 提出。
- 8月28日 北海道開発局長、室蘭開建建設部長宛【環境保全
 措置を講ずることなくダム堤体建設工事用道路建
 設を開始したことへの抗議文】FAX 提出および
 道政記者クラブに投げ込み。
- 9月11日 北海道開発局長、室蘭開建建設部長宛(平取ダム)
 【ダム堤体建設工事用道路建設に関する質問その
 2】FAX 提出。

新入会員紹介

2013年5月~2013年7月
 【A会員】西島 和、井上 剛

寄贈図書紹介

・福地郁子さんより
 「自然ガイド 藻岩山・円山」さっぽろ調査館編著 北海道
 新聞社発行

寄付金

ありがとうございます
 岡田 正著さん 30,000円 松野 誠也さん 5,000円

会費納入のお願い

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、
 未納の方は至急納入下さいますようお願いいたします。

個人A会員 4,000円
 個人B会員 2,000円
 (A会員と同一世帯の会員)
 学生会員 2,000円
 団体会員 1口 15,000円

〈納入口座〉
 郵便振替口座 02710-7-4055
 北洋銀行本店営業部(普通)0017259
 北海道銀行本店営業部(普通)0101444
 〈口座名〉一般社団法人 北海道自然保護協会

要望書など

- 7月7日 北海道開発局長、室蘭開建建設部長宛(平取ダム)
 【ダム堤体建設工事用道路建設に関する要望】FAX
 提出。
- 7月22日 北海道知事あて【平成25年度エゾシカの捕獲禁止
 及び制限(道案)に係る意見書】提出。

2013年10月31日発行 一般社団法人北海道自然保護協会・佐藤 謙 ☎060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5 6階

NC10月号 No.159 ホームページ: <http://nc-hokkaido.or.jp>

☎(011)251-5465 FAX (011)211-8465

Eメール: info@nc-hokkaido.or.jp

会費 個人A会員4,000円 個人B会員2,000円 学生会員2,000円 団体会員一口15,000円 郵便振替02710-7-4055 印刷(株)フロンティア企画印刷

※ この紙は再生紙を使用しています。

